

【ねがいましては】

平成26年9月25日

KYOWA SCHOOL

第287号

「成績偏重」

8月、アメリカの映画俳優であるロビンウィリアムズさんが亡くなりました。私の大好きな俳優のおひとりです。彼の主演作品である「パッチアダムス」は、私の一番のお気に入りです。自殺癖のある主人公（パッチ）が、自ら進んで精神病院に入った時、患者の一人に出会います。片手を出し、「君、何本に見える？」誰もが4本にしか見えない指を差し出し、「もっと奥を見つめるんだ、人の見ようとしないうところを見るんだ。そうだ、8本が正解だ。」生きるヒントをいただきます。そして、その映画の終盤、学生たちの前で演説をします。

「成績ばかりを追求しては、本当の学びを手に入れることはできないぞ。」

(Let that be the focus of your studies, and not a quest for grades.)

直訳すると、「あなた方の真の学びに焦点をあてなさい。成績を追及することではないのだ。」

というようなことになりそうです。この映画の中では、翻訳者が「成績偏重」と訳しています。

この映画、作成されたのは1998年。16年ほど前になります。アメリカでも教育に関する問題は根深いものがあると思います。ロビンウィリアムズが最も声高になっていた部分が、この部分でした。監督さんも同様、この部分にこの作品のポイントを置いているように感じました。

さて、夏休みも終わり、子どもたちにもいつもの日常が戻ってきました。いったい夏休みの40日間は、子どもたちにとって何なのでしょう。ある高校生は、毎日のように宿題に向かっていました。その子は地域でも有数の進学校に進学したにもかかわらず、宿題に苦しめられていました。「苦しめられて」と、あえて書かせていただいたのは、進学校に入学したのであれば、夏休み40日、日頃から自分が取り組んでみたかった研究に時間を使ったかったのではと思うからです。たしかに数年後、大学受験というものが待ち構えているかもしれませんが。しかし高校受験という門をくぐった後、かねがね打ち込んでみたかった研究があったのなら、思う存分没頭していただきたいのです。

真の生きることとは、ポジティブな状態が継続することだと考えている私ですので、宿題に向かっていて表情に活気がないのを見てしまうと、どうしても「青春」って何なのだろうと考えてしまいます。

自由研究の宿題も出るようですが、やはりそこは後々評価につながるものが脳裏に出てしまえば、ちょっぴり憂鬱なものになりそうです。

評価関係なし、とにかくがむしゃらに、自由に、時間のことなど気にせずに、思う存分何でもよいから研究してみなさい。そんな機会を持っていただきたいと思うのです。

今、生きる目標をもっている子たちは少数だと思います。あるとすれば、部活動、成績、進学……。たしかにそのどれもが、自身、集中を持って取り組むことができればそれに越したことはありません。しかし私には何か物足りないのです。目の前にある「おかず」を真剣に食べているだけのような気がしてならないのです。

おかずを作る。誰も食したことの無い新型のおかずです。

失敗したらどうしよう。変な目で見られたらどうしよう。などと、他を全く意識しない時間を思う存分持たせてあげたい。そして出来上がったおかずを堂々と披露する。「どうですか、私の作品は……。」「うー、まずい!」「えっ、そんなはずは……。」誰もがニコニコした空気であふれます。

その40日間にあった共通したもの……前向きです。

子どもたちには学校へ行き始めると極めて短い期間で、勉強に対する恐怖心が宿ってきます。今の教育制度が簡単に変えられないのであれば、せめて夏休みの間でも、恐怖心など全く感じない時間を持たせることができたらと思います。ひとつのことに夢中になる。その延長線上にあるものが社会への貢献につながるものであれば、これ以上のものはありません。人と争う学びではなく、自分の中で自分だけが自由に希望に満ち溢れながら泳ぎ回る。つぎからつぎへと創造が広がる。そんな時間を持たせてあげたいものです。

ロビンウィリアムズさんは、パッチアダムスの中で常に明るさを振りまきながら患者さんたちと触れ合います。ある老婦人が夢を語ります。「私の子供のころ、母がよくスパゲティを作ってくれた。だから、一度でいいからスパゲティの海の中で泳いでみたい……。」パッチは実現させます。多くの看護師さんや医師の見守る中で、拍手を浴びながらスパゲティのプールの中をパッチと二人で泳ぎます。

体の中の病は癒えなくても、心の中の病はすっかり治ってしまいます。それも大切な医療です。

私は日頃、子どもたちの技能や成績に直接携わる仕事をしているかもしれませんが、でも、感じます。子どもたちの心を元気にさせることが、子どもたちが自分自身の力で次から次へと、連鎖的に力強く歩けるエネルギーを作り出すに違いないと。それは成績が上がったからではない。間違えても、何度でもひたむきに歩こうとすることを、褒めて褒めたてることではないかと。

僕には、私には、前向きに歩くことのできる空間がある。どんなに失敗しようとも、前向きになっていられる空間がある。そんな空間づくりに勤しんでまいります。ありがとね!まじめさんたち……!